



待ち合わせ



阿波野治

寝過ごしたせいで、身支度を整えて自宅を出たときには、待ち合わせの時間をすでに四時間も過ぎていた。

あちゃーと思いながら目的地まで向かうと、待ち合わせ場所に指定したサイゼリヤの入り口の前で、今日一緒にランチをする予定だった友人の麻子が、チャラ男にナンパされていた。あちゃーと思った。チャラ男は、EXILEのメンバーのなんとかという人に似ていた。

ちなみに麻子は、AKB48のメンバーのなんとかという子に生き写しかと思うくらいそっくりで、友達からは目と目の間が近すぎることを頻繁に指摘されている。

上戸彩似のあたしは、電柱の陰から様子を覗うことにした。

ナンパしただけあって、チャラ男は麻子に大層熱を上げているらしかった。対するあっちゃんは、表情や仕草などから判断する限り、どうやらチャラ男の誘いを迷惑がっているらしい。全く、何様のつもりなのだろう。男友達から言われてるほど美人じゃないくせに。

「マジ四時間も待って来ないんだったら、マジでもう来ないって。友達とかマジ放っておいてさ、マジ俺と遊ぼうよ。俺、マジでいいところ知ってるから。いや、マジで」

チャラ男の発言はいかにも偏差値が低く、語彙は小学校五年生の男子並だ。

しかし前田のあっちゃんは、四時間も放置プレイを食らったのが流石に堪えたらしく、チャラ男の誘いに心が徐々に傾きつつあるらしかった。あちゃーと思う。確かに麻子は、先々週彼氏に淋病を移された挙げ句ふられたばかりな上に、元々尻が軽い。このままだとガチで、二人で仲良く、行くところまで行っちゃうかもしれない。十年来の友人であるあたしとの約束をすっぽかして。顔面センターの分際で……。

そのとき突然、「笑点」のテーマソングが軽快に響き始めた。一拍の間を置いて、チャラ男がジーンズのポケットをまさぐった。音源は、チャラ男のケータイだった。あちゃーと思った。近すぎる位置に両目のある麻子の顔面が白々と冷めていくのが見て取れる。

あたしはここで唐突に二人の前に躍り出て、「あっちゃん、お待たせえ」と馴れ馴れしげに片手を上げた。指定の時間から四時間遅れての待ち人の登場に、麻子は苦虫のうんこを嘔み潰したような顔をしている。

チャラ男はおもむろにケータイを開き、画面を一目見るや否や、「やっべ、笑点、もうすぐ始まっちゃう」などと呟いて、足早にその場から去っていった。

「遅い！ 遅すぎる！」

前田麻子十九歳独身は大いにご立腹の様子である。ナンパ野郎を撃退した恩も忘れて、と思ったのだけど、よく考えたらそれは「笑点」の御陰だった。偏に歌丸師匠の威光の賜物だった。あたしの御陰とかじゃ全然ないや。

「十年来の友人を四時間も待たせるくらいだから、なにか深い事情があるのよね？ だったら、それがなんなのか、ちゃんと説明して」

麻子は憤然と捲し立てる。無駄話はいいから、さっさとサイゼリヤでご飯を済ませて、ユニクロで冬物のアウターを買って帰ろう。そう軽々しく言える雰囲気なんかじゃなかった。

「黙ってないで、さっさと言いなさいよ。ほら、早く」

麻子が強い口調で再三促すものだから、あたしはお言葉に甘えて、四時間遅れで家を出たときから抱いていた疑問を口にすることにした。

「じゃあ訊くけど、あっちゃん、今からあたしたちがとる食事って、遅い昼食になるのかな？ それとも早い夕食になるのかな？」

そう問いかけた途端、麻子の表情が真剣なものに様変わりした。それを中空へと定め、暫時黙考したあと、ハンドバッグからおもむろにスマートフォンを取り出す。

画面に表示された現在の時刻は、午後の五時を十分ほど回っていた。

「……さあ。分かんないけど、多分、おやつになるんじゃない」

麻子の返答は木で鼻を括ったようで、投げやりでもあったけれど、声の響きからはそこはことない信憑性が感じられたんだぜ。